

総合科学技術会議

科学技術外交戦略タスク・フォース報告書案に対するコメント

武内進一
(JICA 研究所)

1. 第2章(2.2)の書きぶりについて

「アフリカ諸国の政治・経済・社会的状況を見ると・・・」の段落の書きぶりについて、若干の工夫があったほうがよいと感じた。以下、一例を示す。

「アフリカ諸国の政治・経済・社会的状況を見ると、多くの国において貧困や紛争の蔓延等の様々な課題があり、いわば「脆弱国家」であることが特徴としてあげられる。そのような中、科学技術については、予算・人材・技術の不足により高等教育・研究機関の多くが危機的な状況にあり、研究開発が先進国の援助機関・大学等からの支援・共同研究に依存しているとの指摘がある。また、「脆弱国家」の性格とも関連するが、科学技術政策の方向性等が政治状況に大きく左右される傾向がある。」

2. 対アフリカ科学技術外交戦略について

サブサハラ・アフリカ諸国の多くが上述の「脆弱国家」であることを踏まえれば、科学技術に関しては、当面、競合という側面よりも協力・支援という性格が強くなる。その場合、考えるべき3つの論点がある。

(1)支援の枠組み

科学技術に関する支援の枠組みとしては、二国間、多国間(国際機関経由)、そしてハブ・スポーク(日ア科学技術大臣会合など)、およびそれらの組み合わせが考えられる。残念ながら、日本とアフリカとの関係はこれまで薄く、人的なネットワークの形成も進んでいない。ハブ・スポーク関係での議論は政治的に目立ちやすいし、時に効率的だが、二国間関係が十分深化しない場合には現実離れた内容に陥る危険がある。二国間枠組みを確実に発展させることを基本とすべきだろう。

その際、開発や紛争解決に関して対アフリカ支援がグローバル・イシューになっている現状を考えれば、国際機関での議論をフォローし、消極的にはそれと矛盾しない、積極的にはそこにアピールする支援策を打ち出すことが重要である。国際機関経由の支援と二国間枠組みとをリンクさせることができれば、より望ましい。

(2)支援の内容

P.20 にアフリカ諸国が関心を有する科学技術重点分野が挙げられている。ここで示されたアフリカ側のニーズに合わせられれば望ましいが、これまでの日本・アフリカ関係を考えれば、ニーズの高い分野を優先しつつ、こちらのできるところから協力を始めるという方法が、より現実的であるように思われる。特に、アフリカに関心を持つ研究者が具体的に存在する分野は、日本側の研究者にインセンティブがあるため、支援が進みやすい。

P.20 に記載されたアフリカからの要請が強い分野のなかでは、農業や医療に関しては日本でもアフリカをフィールドとした研究が行われてきた。これらは、重点的な協力・支援分野となりうる。一方、日本ではその他にも、霊長類学、環境学、地球物理学(火山・地震)などの分野で、アフリカに関する高い水準の研究が蓄積されてきた。日本側の研究者のインセンティブが期待できる、こうした分野の研究を後押しすることも、日本とアフリカの科学技術協力の深化という観点から重要な意味を持つと考えられる。

(3)今後の課題

多くのアフリカ諸国では、科学技術協力を実施しようとする、様々な困難に直面する。その原因は大別して 2 つあり、一つは当該国の特に行政的なキャパシティに由来するもの、もうひとつは日本側が現地の十分な情報や人的ネットワークを持たないという事実由来する困難である。

2 つの原因のうち、前者はある程度所与と考えざるを得ない。したがって、後者について、どのくらい有効な対応ができるかが科学技術協力の推進にあたって重要な意味を持つ。この点で、研究ネットワーク形成や研究協力関係の構築に際して、アフリカ側に展開している日本の公的な在外拠点(大使館、JICA、JETRO など)の支援が制度化されることが望ましい。科学技術面の関係構築・強化を当該国に対する経済協力・援助戦略のなかに位置づけ、バックアップする体制作りを考えるべきであろう。